



Title	現代言葉遣い小考 (三) : 国語を教える者の自戒のために
Author(s)	後藤, 秋正
Citation	札幌国語研究, 3: 29-44
Issue Date	1998
URL	<a href="http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2613">http://s-ir.sap.hokkyodai.ac.jp/dspace/handle/123456789/2613</a>
Rights	本文ファイルはNIIから提供されたものである。

# 現代言葉遣い小考 (三)

— 国語を教える者の自戒のために —

後 藤 秋 正

本誌の創刊号と第二号に、「現代言葉遣い小考」を載せても  
らった。その後、編集を担当しているY・H氏からは、「え  
えっ!」、まだ続けるのか。K・E先生に送ったら、後藤に、も  
ういい加減にしろと伝える、という葉書が来たぞ。」と、彼は  
小生がビビってしまうことを熟知しているK博士の名前まで持  
ち出して執筆継続の断念を迫るようなことを言われたが、気  
なる言葉遣いはまだまだ減りそうな気配がない。よって、本号  
にも無理を言つて、続編を載せてもらうことにした。Y・H氏  
の発言が真実なら、K・E先生、ゴメンナサイ。

①「芸能トピック」(毎日新聞、九六・一一・三〇付け朝刊)

●「賞金百万円を掛け、子供が制限時間内に、母親に言いつけ  
られた三品目を買う物する。」

見出しには、「おつかいで百万円もらえたかな?賞金獲得  
TV番組新通市場でロケ」とある。この番組は、子供より、  
母親の必死の形相がおもしろい。しかし、百万円を壁かどこ  
かに引っ掛けて置いておく訳ではないのだから、「賭け」と

してもらわないといけない。

②池田瓢阿『奉天の玳皮蓋』(里文出版、八二・七)

●二八頁「天府井(ワンフジン)」「瑠璃庁(ルリチャン)」

(一)内は、ルビ。前者は王府井だろうし、後者は、瑠璃  
廠だろう。この古書は、帯に「茶道竹工芸界の第一人者であり、  
古美術随筆集でエッセイスト賞候補に推された筆者」とあつ  
たので、つい購入してみた。四三頁「馬(マーチョ)」は、  
馬車。一四七頁「幾天面家(チイテンホイジア)」は、幾天  
回家。兵隊のインチキ中国語に噛みついて仕方がないか。  
五七頁「対日貨排斥」など、どう読むのか。三九頁「残滓」  
には、わざわざ「さんとう」とルビが振ってある。一五四頁  
「全々ロシア語は解らなかつた」は、全然解らない。送り仮  
名も不思議なのが多い。「楽み」「馴れ親んで」「探がして」  
などなど。まだまだあるが、本当に何とか賞の候補になつた  
のかしらん。信じられない。

③岸本葉子『よい旅を、アジア』(講談社文庫、九六・一一)

●三九頁「蘭嶼旅行者」のツアーバッジを胸にした一行が待っていて……、」

台湾旅行のひとつま。「旅行者」は、たぶん「旅行社」だろうね。なかなかよく書けている。「旅本」(帯に、「はじける元気と好奇心 私の旅はアジアからー台湾、ソウル、チベット、雲南……哀愁の旅本」とある)。ふうん、このごろは、旅行記とか紀行とは言わずに、旅本と言うのか。筆者は北京に一年留学した若い女性だそうだが、実にしつかりと地に足を着けて旅を楽しんでいる。ミスプリントは、きつとここだけに違いない。同じ筆者の「なまいき始めー私の転職・留学物語」も良書だった。

④石川郁「北京で七年暮らしてみれば」(株)トラベルジャーナル、九六・九)

●六〇頁「有名な哈密瓜、葡萄、荔枝、竜丸……などが味わえる。」  
「哈密瓜」は、哈密瓜の、「竜丸」は、竜眼の誤り。ハミ瓜は、メロンの一種。トゥルファン盆地の特産。シルクロードを訪ねたとき、敦煌城内からバスに積んで行ったものを、青龍刀のような包丁で切り分けてもらって莫高窟前の広場で食べた、あの味は忘れられない。「超体験的生活事情」と帯にある。著者(女性)は二年間北京に留学したのち、現地の外文出版社の翻訳スタッフなどを務めた。文字・メディアなどにも目を配っている。「バス・地下鉄をどう乗りこなす?」「賢いマネー・両替術」「賢く安い通信・郵便術」などのコラムも参考になる。北京長期滞在予定者必携の書。

⑤NHKテレビ「クローズアップ現代 重油流出事故」(九七・一・九、午後九時五〇分ごろ)

●「界面活性剤の散布は、もろはのやいば」

ロシアタンカーの沈没による重油の大量流出によって、日本海沿岸は大きな被害を受けつつある。重油を沖合で処理するためには、界面活性剤の散布が有効なのだそうだが、この薬剤も大量に使用すると環境に悪影響があるらしい(合成洗剤がその例)。これは、NHKのインタビュアーに答えた、京都海洋センターの某所長の言葉。「諸(両)刃の剣(もろはのつるぎ)」(良い効果をもたらす可能性と多大な危険性を併せもつ譬え)と言ってもらいたい。「諸刃の刃」では、両側についた刃のその刃となつて、何が何だかわからない。

一〇月二〇日夕刻六時からのNHKラジオでも、山田シンジという解説委員が同じことを言っていた。やんぬるかな。

⑥黒田信一「アジア大バカ珍道中」(情報センター出版局、九六・一二)

●一〇一頁「『ホフ』というのはビアホールのこと、ソウル市内にたくさん点在している。」一七四頁「パゴダというのは、……何千年も前に建てられたものから新しいものまで、数多くが点在している。」

「点在」は、「あちこちに散らばつてあること。散在。」(『辞林』21)。これが「たくさん」「数多く」と結びつくのは違和感があるなあ。

●一四一頁「おれのなかでの機内食ランク再下位を独走状態で

突つ走るのが、イラク航空である。」同「冷え切つた機内食と有料のアルコールでまさにダントツの再下位である。」

●二四六頁「慌てて喉に力を入れて、ビールを胃の腑に最逆流させた。」

前者が「最」で、後者が「再」であることは見やすい。この本は、ソファーにひっくり返つて読み流すのに恰好のものだ。しかし、著者の泊まる安ホテルの部屋などにやたらとごきぶりが登場して、そのたびに「ぎええええええええええええ！」などと、特大活字で驚くのはうんざり。道産子のゴキブリ恐怖症はよくわかったが。小生など特にゴキブリ愛好者という訳ではないが、学生時代に住んでいた板橋区の木造安アパートでは、ゴキブリが親子連れで階段を散歩していたし、枕元に置いた本の上を這い回っているガサゴソという音で目覚めたこともあったから、慣れてはいる。

⑦小沼早苗『中国人の素顔』（みくに書房、九六・一〇）

●二七頁「ハルピンは、……中国東北地方最大の都市であり黒龍江省の省都です。」

ハルピンが省都であることは確かだが、「東北地方最大」と言つたら、瀋陽の人々が怒る（笑う？）だろう。著者は赤坂でクラブを経営したのち、黒龍江大学の教授（華道）になつたという。非専門家の書いた書物にいちいち目くらをたてることはないのだが、やはり気になる。「います」「おります」という文末の不統一については余りにも多すぎるので言わないことにする。また、この人は「そこはかとなく」という言

葉を偏愛しているらしく頻出するのだが、「そこはかとなく高いものをご馳走したんだぞという態度をチラリと見せる人もいます。」（二三三頁）は、くどくありません？「そこはかとなく風の音」（二三五頁）もよく分からない。さらに「同志」もめちやくちやに多い。どうしても漢字を使いたいのなら、「同士」とすべきところを、すべて同志を使っている。「中国人同志の会話」（二三五頁）「人間同志の計算」（七四頁）「知らない人同志」（一五八頁）などなどだが、これ以上は言わない。

●一八六頁「目を刮目させて一部始終を熟視し、……。」

これは意味が、三重にダブっている。「刮目」だけで、「目をこすつてよく見る」（『新字源』）の意。「約三時間の所要時間」（二二九頁）もくどい。悪口ばかり言つたが、初めて中国で生活する人には役に立つこともあるのかもしれない。なにせこの本には、「前在中国大使」の立派な序文があるのだから。それにしても仙台出張中（九七・二・一八）に求めたこの本のおかげで、機内でも退屈することはなかったのは幸い。

⑧NHKラジオ「ティールーム二二」（九七・二・二五、午前一一時半ころ）

●「レストランへ行くと、キラボシのようにスターが並んでいて……」

東大総合文化研究所？の松原ユウイチロウという助教授が言っていた。「キラボシ」は、漢字で書けば「綺羅星」となるのだろうが、そんな星はない。と、ここまで書いて、「辞

林21』を見たら『綺羅星』の見出しがあつて、「『綺羅、星の如し』という言い方から、誤つてできた語』立派な人が連なり並んでいることを言う語。」とあつた。その通りなのだが、見出し語に立てられるくらいだから、その浸透ぶりがわかる。綺羅は、あやぎぬとうすぎぬの意。美しい衣装、転じて美しい衣装を着た人をも指す。しかし、「綺羅、星の如し」の出典は不明。ただし、「綺羅星」を『大漢和』で引いたら、「きらきらする星。」とあり、「謡曲、鉢木」とあつた。この言い方もかなり遡れるらしい。

「カンパツを入れず」と言う人も増えているが、先日の教授会でS教授が、「カン、ハツを入れず」と、一拍間を置いて発言したときは、失礼ながらこの人は「間、髪を入れず」というのがわかつているのだな、とうれしくなった。

⑨梅原郁「万里の長城とはなにか」(『しにか』大修館書店、九七・

二)

●一七頁「七世紀の中ば」

「半ば」とするべし。「中葉」(ちゅうよう)を「なかば」とよんで、「葉」だけを平仮名にしたのだろうか。考えすぎだろうね。

●「しにか」広告欄「悲しくも痛わしい(今は亡きわが)父母は、……」

大修館書店『漢文名言辞典』の、「哀哀たる父母、我を生みて劬勞す」(『詩経』小雅、蓼莪)の句に付された解説。「いたわしい」は、「勞わしい」(気の毒に感ぜられる)だろう。「痛

ましい」と混同したか。

⑩「中国文学史 後期レポート」(九七・二・二八提出)より

●「肝銘を受けた」「目先している」

またまたウチの学生達の恥をさらすようで気がひけるが、誤字を少々。「肝銘」は、「肝に銘ずる」から類推して誤つたものと好意的に解釈しておこう。「講議」は、口を酸っぱくして言つたせい、一人しかいなかった。その他の誤り。「文選」を「文撰」、「遭遇」を「遭偶」、「対照的」を「対称的」、「李白」を「季白」(これはシヨック)、「心地好い」を「快ちよい」、「緊張感」を「緊張間」などなど。「見出す」を「見入出す」とした者がいたのは、「見い出す」と誤ることが多い(例えば、木の城たいせつ「バイオ・リージョン21」三月号の六頁にも、「ヒントを見い出す」とある)ので、それに引きずられたか。オオザトを、まず縦棒を引いてから書くためにBの出来そこないになってくる者もいた(九七年度の後期入試の書類でもそうになっているものがあつた。蔓延している)。ただし、学生たちの名譽のために、前期よりも格段に誤字が減つたことだけは言っておこう。

⑪陳舜臣『紙の道(ペーパーロード)』(集英社文庫、九七・一)

●二〇二頁「(石鼓は)さらに陝西から開封に移され、……北京に持って行かれたのだから、……」

「陝西」に、「せんせい」とルビが振つてある。これもよく見る誤り。じつと目を凝らさないと間違ふ。「陝西」が正しい。しかも、「陝中」(甘肅省)「陝中」(河南省)という地名は、

五胡十六国の時代には両方とも存在したのだから余計に混乱させられる。

⑫網干嘉教『アジア史紀行 一考古学徒の遊学記』（関西大学出版部、九六・三）

●四九頁「吉林省社会科学院付（副）院長の楊先生」

この著者は、中国語には詳しくないらしく、「付」が「副」の簡体字だと思いきんでいると見える。他にも「文物局付局長」というのも出てくる。「副」は「副」です。名刺を作るときに、中国でも日本人との交際の多い人は、簡体字が分からない日本人のために繁体字で印刷するが、小生の知り合いの人でも、簡体字を用いた瀋陽師範学院の高岐清氏の名刺は、「高等教育学会副会長」となっているし、付局長とか付主任となっているのは一枚もありません。

●四九頁「どこでも屈託なしに寝ることを心情とする私たち」

「屈託」の用法もおかしいが、「心情」は、「信条」でしょう。

五〇頁には、「多くの人民の方々が、美しい景色を楽しんでおられた。」という不思議な敬語表現？もある。

●八四頁「大雁塔に昇る」

人がのほろのだから、これは「登る」だろう。

●九六頁「茂陵から乾陵に向かった。……帝王の陵、山の如く」といわれる意味がわかる。

出典は調べていないが、『山の如し』と終止形にしてもらいたい。この本は勧められないネエ。

⑬馳星周『不夜城』（角川書店、九七・二）

●一二四頁「改革解放路線」

「改革開放路線」でしょう。一五二頁にも、「解放政策が続いている現在の大陸」とある。この本、新宿歌舞伎町を舞台にした、台湾、福建、北京などなどのマフィアの熾烈な抗争（九七・二・二三午前のラジオのニュースでも、日本に持ちこまれる麻薬は中国産のものが多いと言っていた）を描いてリアルなものがあるが、小説としての価値はよくわからない（続編の『鎮魂歌 不夜城Ⅱ』も同じ）。

⑭井上ひさし「頁間を読む」（紀田順一郎編『古書 日本の名随筆別巻12』作品社、九五・五所収）

●二二五頁「赤穂浪人の復讐を肯とするのでもなく、また否とするのでもなく、……」

「是とするのでもなく」の誤りでしょう。初出は、『本の枕草紙』（文芸春秋、八二・一一）だそうで、この文庫本は天井裏の段ボールの中にあるはずだが、手間がかかるので探すのは断念。このエッセー集には、興味深い文章が数多く載っており、巻末の紀田順一郎「本をめぐる本の話」に古本屋にちなんだ作品がいくつか紹介されている。梶山季之『せどり男爵数奇譚』（河出文庫）、小寺謙吉『寶石本わすれな草』（西沢書店）、野呂邦暢『愛についてのデッサン』（角川書店）、ヘレイン・ハンフ『チャリング・クロス街84番地』（講談社）、志多三郎『街の古本屋入門』（石田書店・コルベ出版社。これは九七年八月に、KG情報出版から復刊された）などなど。ぜひとも読んでみたいものだ。なお、『古書 日本の名随筆』

には続編もあり、これも静岡の吉見書店で購入してきた。

⑮三輪福松「文庫蒐集の思い出」(紀田順一郎編『古書Ⅱ 日本の名随筆別巻72』作品社、九七・二所収)

●四八頁「(文庫蒐集が)病コウモウに入り、月賦の洋服すら買えなかった。」

しばしば指摘されることだが、「病コウモウ」は、「病膏育」(ヤマイコウコウ)と書く。「膏」は、心臓の下部、「育」は、横隔膜の上部。「盲」とは違う。この間に病気が入ると治療の施しようがなくなることから、どうすることもできないほど物事に熱中することも言う。『左伝』成公十年の記事に基づく言葉。「盲」が、「盲」と似ることから、誤って「コウモウ」と読まれるようになった。ついでながら「入る」は「イル」と読んでほしい。

⑯寿岳文章「向日庵夜話 華盛頓の遺髪」(同前所収)

●一一八頁「偶然が祝福をあたえ、力を借す」

小学生の拙い作文でもあるまいし(大学生でも時に見かけるが)、貸すと借りるを間違うとは、と思つて『大漢和』を引いてみると、「借」には、「かす。助ける。」の意味もあつて、『論語』衛靈公篇の、「子曰く、吾は猶ほ史の闕文に及べり。馬有る者、人に借して之に乗らしむと。今は亡きかな。」を挙げてゐる。だから、必ずしも間違ひとは言えないのだが、やはり気になる。それにしても、日本語で、貸す、借りると区分したのはいつごろからののだろうか。寿岳氏の文章の初出は、『書物の共和国 定版』(春秋社、一九八六・八)

とのことだ。

〔補記〕のちに『書物の共和国 定版』を入手して確認したところ、確かに「借す」となっていた。ただし、こちらは旧仮名遣いになっている。

⑰青木正美『古本屋奇人伝』(東京堂出版、九三・九)

●二〇五・二〇六頁「汝は不利の立場に陥(お)ち入らんとすれど」「愚かなる人々に依りて陥(おと)し入れらるるの憂目を見るも」

( )内は、ルビ。著者が、品川力(『古書巡礼』の著者)の翻訳したキップリングの詩「真の人間」(原題は「if」のこと)を引用したもの。「溯る」や「遡る」を「逆上る」としてはいけなものと同様、「陥る」を、「落ち入る」などとしてはいけなものと学生諸君には教えている。この表記は、「落ち入る」と「陥る」の中間種というべきものか。しかし、どうして「陥らんと」「陥れらるる」としないのだろうか。詩人の特殊な感性と言われればそれまでなのだが。

〔補記〕のちにも引くが、この詩はその後、弘南堂で入手した品川力『本豪落第横町』の巻頭に載せられている。ただし、これにはルビはない。

⑱宮城谷昌光『春秋の色』(講談社文庫、九七・一)

●四八頁「幸福の質量感をさずけてくれる本を、私の読んだ本のなかで、中国ものにかぎっていえば、海音寺潮五郎氏の『中国英傑伝』(文春文庫)を手はじめにあげなければならぬ。」  
「……を」「……を」が二箇所に出てきてうるさい。さらに、

読んでいなければ推薦できないのは自明なのだから、「私の読んだ本のなかで」は不要。

●六五頁「春秋の初期には大小の国があわせると百以上あった国がしだいに淘汰され、およそ十国が大国として残った。」

これも「……が」「……が」とダブってうるさい。「百以上あった。」と一旦切って、「それがしだいに」と始めれば良いのに。この人も書きすぎで注意散漫になっているのか。

①⑨ 高校野球部への激励文（NHKテレビスポーツニュース、九七・三・二三夜一時ころ）

●「不闘不屈」

和歌山県日高高校中津分校が、分校としては史上初めて選抜野球に出場することになった。村を挙げてこの野球部を支援してきたことは何回か報道されているが、他の全国の分校からも続々と激励の文章や寄せ書きが届けられているそうだ。これは野球部の部室に貼られていたものの一つ。戦わずして勝つのが戦いの極意とはいえ、試合では無理だろう。「不屈」も「不撓」も「漢書」等に見えている語で、「百折不撓」という熟語もある。だが、「不撓不屈」「不屈不撓」と熟して用いられるようになったのはいつごろのことだろう。

②⑩ 樺山紘一編著『長江文明と日本』（福武書店、八七・二）

●二七六頁「わたしひとりには……はなはだ無知なアマチュアにすぎない。したがって、疎腕のプロフェッショナル集団のなかで、……ひたすらお許しを乞うほかない。」

編著者のあとがき中の一文。この「疎腕」が分からない。

そわん？「大漢和」にもない。しばらくして思い当たった。「疎腕」（らつわん）の誤りなのだ、きっと。

②⑪ 品川力『本豪落第横町』（青英舎発行、星雲社発売、八四・二）

●二〇頁「根本正の抜文がある……。」

跋文でしよう。品川力という人は、東京・本郷で古書店を経営していたという。著者の読書随筆第一弾『古書巡礼』（青英舎発行、星雲社発売、八二・二）の「著者プロフィール」の欄に、「太宰治の『ダス・ゲマイネ』の中のペリカンであり、織田作之助の友。精緻な読書人書誌人であり、……」とあり、本書の帯にある串田孫一の評にも「人の誤謬を論すに勇氣あり、学者文人編集者等は戦兢し且つ密かに敬意を抱く。」とある。実際、随筆のなかでも多くの研究者の著述の中にある誤植（特に人名）を指摘している。だから余計に気になります。

●二五頁「若き日に嗚咽しながら熟読した、内村鑑三の『求安録』」

これも当然「嗚咽」。一八八頁には、「嗚呼是れ詩人の理想ならずや」とある。「嗚呼」なんて語を見たらまずチェックするのが校正の初歩。本当に精緻な読書人なのか。

●七二頁「書物の持つ重量感と気品が心よく調和して……」

一〇七頁にも、「心よく僕を迎えてくれた。」とある。「快く」でしょう。昔はこのように書いたのか。

●一六八頁「一、二度続けて落選したからとて落担しない」

これは「落胆」。ほかにも、「誰れ」「省りみて」「見い出す」（どういうわけか一五七頁だけは、見出される）となっている



「いまだかつて」「シヤれる」(どうせカタカナで書くのなら、  
どうして「シヤれる」としないのだろう)「ジット睨んで」  
(「ジツと」でしよう)「繰り返えされる」「極まって」(決まっ  
て) などなど、気になる表記が頻出するがこのくらいにして  
おく。しかし、立原道造の死の直前、見舞いの友人が、「な  
にかほしいものがあつたらいつてくれ、もつてくるから」と  
告げたところ、「五月の風をゼリーにして持つてきてくれ  
……。」と答えたという話などは、少々キザだけど心に残る。

②群ようこ『またたび東方見聞録』(新潮文庫、九七・八)

●一〇三頁「たくさんの東屋(あずまや)みたいなものが建っ  
ていて、そこがミニ・バーになっている。」

「あずまや」は、四阿、もしくは亭と書くもので、東屋は  
誤字だと思っていた。『辞林21』を見ると、「あずまや【東屋・  
四阿】〔東国風のひなびた家の意という〕①屋根を四方へ葺  
き下ろした建物。寄せ棟造り。②庭園や公園に設ける休憩用  
の小さな建物。……亭(ちん)。』とある。角川『古語辞典』  
もほぼ同じ。知らなかった。不明を恥じる。ちなみに亭をチ  
ンと読むのは、唐音。

②3某氏の講演(市内の某ホテル、九七・三・二九)

●「ケンケンガクガクの議論が交わされた。」

これもよくやる間違い。ケンケンゴウゴウ(喧喧囂囂)、  
カンカンガクガク(侃侃諤諤)の混同。似たようなものだと思  
われがちだが、前者については、「喧喧」は、やかましく  
言い騒ぐさま、「囂囂」は、多くの声がかましいさまで、

どちらも、多くの人が勝手に発言してやかましいことを言い、  
後者については、堂々と正論を主張するさま、忌憚なく議論  
するさまであつて、発言するという点では共通するが、意味  
は全く違う。

②4大庭脩『漢籍輸入の文化史—聖徳太子から吉宗へ』(研文出版、  
九七・一)

●一五頁「この『文選』は、……紅葉山文庫を終て現在宮内庁  
書陵部にある。」

「終て」は当然、「経て」。四三頁「周髀は、日本国見在書目、  
各経書・芸文志はないが、……」は、「にはないが」の誤植。

●三五頁「(『王勃集』中の則天文字は)内藤乾吉氏の研究の結果、  
聖曆(六九八—)以後に始めて用いられるようになったもの  
である。」

「……用いられるようになったことが判明した」としても  
raithたい。

●四七頁「藤堂明保氏の『漢字語言辞典』」

『漢字語源辞典』です。

●五二頁「空海が『篆隸万象名義』を作り、……一五七三四字  
をあげ、……『新撰字鏡』は、……所収漢字は二万千三百字  
に達し、……。」

こういうばらばらな表記を置いて、著者は違和感がない  
のだろうか。五七頁「書籍を名籍に沿えて献上した。」とい  
うのも、「沿」を他動詞に読むのは変だ。添えるか副えるか  
にしてもraithたい。この出版社の本だけはそつとしておきた

かったのだが。

●五九頁「頼長の所蔵書の中には相当数の版本があり、また彼が重要な関心をそそのコレクションであった。」

「重要な関心」というのも意味不明だが、頼長の関心をそそった書籍を集めた結果、コレクションが出来上がったのだらう。この著者は、『江戸時代における中国文化受容の歴史』という研究で、一九八六年に学士院賞を受賞したのだらう。しかし、小生はこの頁あたりで読書意欲を喪失した。

●某氏の発言（札幌市中央区の某ホテル、九七・四・二二）

●「フツシキする」「イッパヒトカラゲ」

某機関と北教大将来構想専門委員会との第二回懇談会の席上での某氏の発言。「払拭（フツシヨク）」の誤りであることはわかりやすい。「シヨク」は漢音、「シキ」は呉音。ただし医学用語？では、病人などの体をふいてきれいにすることを「清拭（セイシキ）」と言いたい。「一把」は、ひとたば、一握り。一握りのものを一からげにするのは当たり前。十把（ジツバ）のものを一からげにするから、いろいろなものを雑然とひとまとめにするという意味になる。「イッパヒトカラゲ」は、その後、某研究発表会の質疑応答でも耳にした。

●民放アナのナレーション（「所さんの20世紀解体新書」HB Cテレビ、九七・四・二三）

●「明治時代の日本からの移民は、身ぐるみ一つで太平洋を渡った。」

「身ぐるみ」は、身に着けているもの全部。これに「一つ」

をつけるからおかしいのだ。身一つとするべきだった。

●山下武「古書を旅する」（青弓社、九七・一）

●二〇頁「疾り去るトラック」

イメージはわからないでもないが、「疾」をはしると読ませるのは無理がある。疾走からの連想か。

●五二頁「カルタゴに組した夫のヌミディア王」

以前にも指摘した。與（与）したが正解。

●一五二頁「有為転変に富むのは人間の運命だけではない。」

「有為転変」は、世の中のものすべてのもが絶えず変化して、しばらくの間も同じ状態にとどまることがないこと（『辞林21』）。これが「富む」なんて言うのかなあ。

●一六九頁「四道河子（ワンダオヘーズ）」

（一）内はルビ。四道河子は遼寧省の東、吉林省との境にある村落。ワンダオは、スーダオでしょう。

●国語科新入生の名前。

●山下公司（やましたこおじ）

受講登録カードに本人がルビを振ったもの。戸籍台帳には文字が登録されるのであって、読み仮名は登録されないものらしいが、「公」をコウではなく、コオと読ませた親の心境はどういうものなのだろう。奈良県出身の本人に聞いたら、「父が占いの爺さんに言われた。」とのこと。

●伴野朗「霧の密約」（朝日新聞社、九五・一〇）

●一四三頁「イギリスは……ドイツとの間にいわゆる、一揚子江協定。を結び、……。」

・「いわゆる、」で改行し、「揚子江協定。」で再び改行している。こんな改行が必要なのか。まして後者の改行の前にある読点はいったいどういう意味なのか。このような不可思議な表記は枚挙にいとまがない。一九五頁には、「いわゆる、ーコックニー。である。」とある。改行も同じ。

●一六八頁「明石の指摘は、さすがに正鶴を得ていた。」

正鶴は、弓のまと、まとの中心。転じて物事の要所・急所。「正鶴を失わず。」（「礼記」射義）などを使う。また、「正鶴を射た意見」なども。「正鶴を得た」は、「的を得た」と同様、あり得ない表現。

●一九一頁「夏目金之介は、……十五歳で漢学塾二松学舎に入学した。……特に陶淵明を好み、『唐宋数千言』から文学の理念を得た。」

『唐宋数千言』とはなんだろう。唐宋とつく書物は多いが、この書物は寡聞にして知らない。漱石に詳しい方、教えてください。ただし収穫は、漱石の文中にあるとは知っていたもの、どの作品にあるのか長いこと気になっていた「御殿場の兎」という表現が、『倫敦塔』にあると判明したこと。「倫敦塔に」行ったのは着後間もないうちの事である。其頃は方角もよく分からんし、地理杯（など）は固より知らん。丸で御殿場の兎が急に日本橋の真中に抛り出された様な心持ちであった。漱石が、御殿場はド田舎であるという偏見を持っていたことは確実で不愉快だが、なんとなく落ち着いた気分になった。大漱石がなんと言おうと、御殿場は富士山の南麓、

箱根外輪山の北麓にあり、今でこそ御殿場線という支線になつてはいるが、丹那トンネルが開通するまでは東海道本線が通つていた、風光明媚な我が生まれ故郷なのだから。

●二五七頁「イギリス史を紐解いていた。」

以前にも指摘した。緋くが正解。天下の？朝日新聞夕刊に連載したこの小説の誤字も、校閲部の目をくぐり抜けたらしい。たいしたことないね。

●二八一頁「かつてないほどの憎しみを、……感じた。」

「かつて」だつてば。三〇三頁にも「かつてない戦慄を覚えた。」とある。イライラする。四九九頁もある小説だが、やたらと説明的で解説的な文章が挿入され、興を削がれることはなほだしい。あとがきで「山野辺画伯の絵に、できの悪い小説が救われた思いがする。」と言う。単行本になつて挿し絵がなくなったから、救われなくなつてしまったのだ。もう一度、『五十年の死角』『九頭の龍』のような本格的な小説を読みたい。無理だろうな

③⑩民放アナのニュース朗読（「ラジオ桜井 ニュースのつば」

HBCラジオ、九七・四・二九、午後四時頃）

●「オーストラリアを訪問中の橋本首相が、日本はテロリストの要求にユイユイダクダクと従う国だというイメージを変えたいと発言。」

「唯々諾々」の「唯」は、呉音はユイ、漢音はイ。唯一、唯物論などはユイと読むが、これはイイダクダク。はいはいと承知するさま、おもねり従うさま。出典は『韓非子』八姦篇。

「優笑侏儒、左右近習、此れ人主未だ命ぜずして唯唯、未だ使わずして諾諾、……。」(俳優・道化・左右・近習のことで、彼らは君主が命令しないうちからははいと答え、まだ用事をいいつけないうちから、かしこまりましたとばかり、……)とある(町田三郎訳注、中公文庫による)。

③①唐沢俊一『古本マニア雑学ノート』(ダイアモンド社、九六・四)

●七六頁「……と、その顛末を面々と書き付けてあったのを読んでいる。」

「綿々と」だろう。「綿々」は、ここでは事細かなさま。まさか、「ツラツラ」と読ませるのではないだろうね。

●八五頁「(古書店の棚荒らしに襲われると)やがてその店の在庫から〇〇関係はスッカスカ、という案配に至る。」

アンバイは、料理・物事・身体に加減や調子を言うが、塩梅と書く人は激減している。按配・按排・按配とも書くらしいが、案配はあまり見ない。しかし、ワープロにはこれも登録されているのだ。分からなくなってきた。

●二二二頁「幻想文学を投げ出した当たりで、ちよつと考えが変わった。」

「辺り」だろう。この本の著者は高校・予備校までは札幌で過ごしたそうで、札幌の古書店の話もあり、気楽な読物になつている。ワープロで原稿を書いているとあるが、「嗚呼」がどうして「嗚呼」と変換されるのだろう。不思議だ。

③②出久根達郎『朝茶と一冊』(リブリオ出版、九六・一一)

●二六頁「干武陵の詩『勸酒』の井伏鱒二訳。」

映画監督五社英雄の娘が父親の姿を描いた『さよならだけが人生さ』の書評。井伏の訳は、『厄除け詩集』(講談社文芸文庫、九四・四)に収められており、容易に見られるようになった。しかし、干武陵は于(ウ)武陵でなくては困る。

●三五頁「……八百枚の小説を書いた。一九九五年十一月に発刊された『笑い絵』という小説である。」

「発刊」という言葉にひっかかった。発刊というのは、継続的に出版・刊行されることを前提にして言うのだろうと思つたからだ。『辞林21』には、「新聞・雑誌などを新しく出版すること」とある。やはり、単行本の小説を発刊するというのは変なのだ。

●一五五頁「(太公望呂尚は)文王に仕えるや才腕を發揮し、ついに周を統一する。」

呂尚が周を統一したわけではない。文王の師となり、さらに武王を補佐して殷を滅ぼし、天下を統一したのだ。本業？の古書ネタが尽きたと見えて新刊書の書評にも手を伸ばしたらしいが、基本的なことは調べてから書いてもらいたい。買わなければいいと言われればそれまでなのだが。

③③土屋英明「中国の性愛文献」二(『東方』一九五、九七・六所載)

●一八頁「台湾の学者・李敖氏は、文学の裏に隠れていた本来の意味を見付けだした。」

李敖氏が、『詩経』に性に係わる描写が多いことを指摘し

ている、と言っているのだが、この「見付けだした」が気になる。小生のワープロも、「みつける」と入力して変換すると、「見付ける」となるので、いつも「見つける」と直している。「辞林21」の見出しも、「見付けだす」「見付ける」等となっていて、誤用とは言えないのだろうか、「付く」というのは何かにくつつけるといふような語感(字感?)があり、「見付けてける」は変だ、と違和感を抱いてしまうのだ。

③林田慎之助『中国文学の底に流れるもの』(創文社、九二・七) 一五五頁「**雕虫論**」(ちよちゅうろん)

この「ちよ」というルビは、単なる「ちょう」のミスプリント。二二三頁「**陽羨鵝籠**」(ようしがろう)は、これも「ようせん……」のミスプリント。しかし、一八一頁「(上野さんは)寓居の裏に、四畳半ほどの差し出し部屋をつくって……」というのは変だなあ。寓居は、「①仮の住まい。わび住まい。②自分の住居の謙称。」(『辞林21』)だが、友人とはいえ他人の住居を寓居と言うのは違和感がある。でも碩学のことだから、きつと根拠があるのだろう。ちなみに、『大漢和』には、「かりのやどり。仮住まい。」とある。

③⑤紀田順一郎『読書人の周辺』(実業之日本社、七九・一一) 三三三頁「古本屋は……、甚だシンドイ商売であって、非能率的なことは言語同断である。」

「言語道断」の誤り、と書いて『大漢和』を引くと、まず、仏教語として、「言葉で述べる方法のたえたこと。又、言葉で説明し得ない奥深い真理。」とあり、『瓔珞経』と『唯摩経』

を出典として挙げるが、ついで「言葉で述べられないほど甚しいこと。慣用上、邪悪なことについてのみいふ。」とあって、こちらには出典がない。しかも、「言語同断」もあって「言語道断と同じ。」とある。あれれ、記憶違いだったのか。それでは、『辞林21』はどうか。こちらには「言語道断」だけがあって、「(「言葉で説明する道を断つ」の意から)①(仏)根本的な真理が言葉で説明しつくせないこと。②言葉で言い表わしようのないほど、ひどいさま。」とあり、『大漢和』と大差ない。さればと思つて『漢語大詞典』を引くと、これも「言語道断」しか載せない。こうしてみると、紀田氏が敢えて「言語同断」を選んだ必然性は認められないから、やはり誤用だろう。

④一三三頁「(岩波文庫の復刊のうち)早期品切れになったものは『農業全書』……『史記平準書・漢書食貨誌』」

これは『漢書食貨志』の誤り。この文庫本は一九四二年に第一刷が出て、なんと三十五年後の一九七七年に第二刷が出ている。

④三三三頁「**大学教養過程**」

これも課程の誤り。この本は、紀田順一郎のものを九七年六月の東急古書展で、数冊まとめて購入したうちの一冊。

③⑥高橋たか子『高橋和巳という人―二十五年の後に―』(河出書房新社、九七・一二)

④一二二頁「小説家ならではの超ユニークな感覚」  
「超むかつく」などの「超……」言葉が使われるようになった

て久しい。「辞林21」も、「ちょう【超】(接頭) ①程度が特に極端なものである意を表す。「満員」と述べている。若者言葉なのだろうと思っていたのだが、高橋たか子は六十代。ここまで浸透してきたということなのか。一二六頁にも「和巳の超ユニークさを思う時、……。」とある。それにしても和巳の死後、すでに二十五年(七一・五・三没)もたつていたのか。地下鉄茗荷谷駅近くの文京区小日向の狭い下宿で、出たばかりの『邪宗門』を、夜を徹して読み耽ったところのことがしきりに思い出される。

その後、出久根達郎『恋文の香り』(後出)の「目からウロコ」に、次のようにあるのを見つけた。やや長くなるが引用しておく。「言葉というものは、自分が考えているより古くからある、と知って、目からウロコであった。若者が『超すごい』などと言う。この『超』は、すでに昭和の初めに流行していた。『超キレー』などと用いて、現代と全く同じである。『ウルトラ』などという言葉も同時に遣われていた。東京オリンピックで生まれた語ではない。『ウルトラ超特級レコード破り』などと、昭和八年に落語家が遣っている。」前記は小生の早とちりだったらしい。ちなみに、コップとフラスコは江戸の川柳にあり、コカコーラの語も、高村光太郎の「道程」に、「コカコオラもう一杯」とあるそうなの。

③⑦尾形界而『古書無月譚』(東京堂出版、九二・一一)

●五頁「正鶴を得ない」

②⑨でも述べた。しつこいようだが、正鶴の正は、ただしい

の意ではなく、鴟(とびの一種)という鳥を描いた布を張った弓的。鶴は鶴(くぐい)を描いた皮製のまと。「正鶴を得ない」とは言わない。

●五四頁「料理に舌づつみをうちながら杯をかさねている」

耳では聞くことがあるが、印刷されるのは珍しい。当然ながら、舌鼓(したつづみ)が正しい。一二〇頁「透谷の『楚囚の詩』」は、『楚囚の詩』のミスプリント。

●一四四頁「名前が不意に視えた。」

「視る」は、見ようとして見る、じつと見るの意だから、「不意に」とはそぐわない。「見えた」としてもらいたい。この本は、立原道造の詩集「萱草に寄す」(カヤグサと読む無知な者が多い、と本文中にある)を中心に据え、古書業界の生態?を生き生きと描いて面白いのだが……。

③⑧赤坂忠亮「随想」(日中友好新聞、九七・六・二五)

●「帰心似前」

随想の表題。帰りたい気持は以前と変わらない、と言うのだろうと思つて読んだら、末尾に「通訳の初体験は、帝国陸軍の『帰心似箭』の代弁だった。」とあった。筆者は東亜同文書院の学生で、国民党部隊の通訳をした思い出を綴ったもの。「帰心」は、西晋・王讚の「雜詩」(『文選』卷二九)の冒頭に、「朔風 秋草を動かし、辺馬 帰心有り」と見えるが、「帰心似箭」(きしん やのごとし。似は如と同じ)は、比較的新しい言葉らしい。

③⑨出久根達郎『恋文の香り』(文芸春秋、九七・五)

●一三九頁「色鉛筆で塗りつぶすようにした。」

これが「色鉛筆」の誤植であることはすぐわかる。しかし、ここで言いたいのはそのことではない。次の二つの文章を読み比べてほしい。

※一〇五頁「あるとき同級生と二人で、学校の花壇を荒らし、たまたま(ういういしい女性教師の)白井先生に見つかった。お小言をくった。……白井先生は、こう言って私たちをさとした。『一つのつぼみは、たった一度しかひらかないのよ』……」

(「ああちゃん」)

※一四三頁「小学生の時、学校の花壇にさきほこっていたチューリップの花冠を、級友と面白がって次々と摘んでしまったことがある。先生に見とがめられ、こっぴどく怒られた。……『かわいそうに、死んでしまったらう』と先生が言った。『ひとつのツボミは、一度しか開かないんだぞ。もう少しチューリップの悲鳴を聞いていろ』……」

(「いのちを教える」)

後者は男性教師に変わっている。北海道新聞に載せたものだそうだが、田舎?の道新の読者など気がつくまいと思っただけなら許せないことだ。次の例。

※八六頁「菓子箱に、ひからびた梅干しの種が詰まっているのを見つけたときは、カミさんが気味悪がった。お手玉に用いる、と老母は答えたそうだが、何かと勘違いしたのであらう。……」

(「もったいながり屋」)

※一七八頁「(老母の)遺品を整理していたら、古ぼけた

布袋が出てきた。梅干しの種が、両手ですくうほど入っていた。なんのために、保存していたのだろう。……」

(「何のつもりに」)

菓子箱か布袋か、しかも一度答えを聞いているのに忘れていた。さらにもう一例。

※三三頁「私の生家は山の上の一軒家で、電気が引かれてなかった。ランプの石油や灯芯、時にホヤを買いに行くのも私の役目だった。ランプ生活者は村にわが家だけなのに、農協の購買部には、これらの品がいつも揃っていた。」

(「ランプ」)

※一九四頁「テレビが普及し始めた時代に、わが家はそのランプを唯一のあかりに用いていた。……小学校から帰ると、毎日、ランプそうじをするのが私の役目であった。……そのころランプを使う家は、村でわが家だけだったので、ホヤの替えが手に入らない。雑貨屋に頼んで、東京から取り寄せてもらうのだが、日数がかかる。」

(「ランプのあかり」)

農協の購買部か雑貨屋なのか、ホヤは揃っていたのかいなかっただのか、どちらかがうそ。これも読者を馬鹿にしている例。些細なこと、とは言えない。別の本でネタが似ていることは今までも時折見かけたが、同じ本のなかにこうも出てくるとは!!出久根氏の文章とはだいぶつきあった。しかし、もう二度と買わない、だろう。

④鳥居省三『石川啄木―その釧路時代』(釧路新書七、九六・三)

●三八頁「(愛国婦人会は) 丘士や家族の救護活動を行ったもので、……」

これは「兵士」ですね。

●三九頁「今や家庭の女皇となる美名のみには満足せざるなりぬ。……婦人も亦男子と共に同じ人間なりてふ白明の理の意識なり。」

「せざるなりぬ」というのが判らない。「白明」は「自明」の誤植。なお、二百頁弱のこの本には「芸奴」という言葉が頻出する。初めはギョツとしたが、後半になるといつのまにか「芸妓」になる。鳥居氏は釧路の研究者だけあって、啄木に関して多くの知見を得たが、誤植は直してくれないだろうか。初版は昭和五十五年に出て版を重ねているのに。

④立松和平のコメント(堂々日本史「追跡・北の黒船事件」NHKテレビ、九七・八・一九、午後一〇時過ぎ)

●「津軽藩士にはエトロフでロシアに襲撃された時の汚名を挽回しようとする意識があった。」

立松氏ほどの？小説家でも、ついやってしまう。「汚名」は雪ぐものであって、挽回(「失ったものをとりかえすこと」。

『辞林21』)するものではない。

④群ようこ『東洋ごろごろ藤栗毛』(新潮文庫、九七・一〇)

●一六八―九頁「一同が目を奪われたのは、本体にカラーの毛沢東の肖像がある銀色のライターであった。ライターの蓋を開けると、『たーたらー、たーたらー』というメロディが流れる。……『これは何の曲ですか』赤門君が聞くと、ネ

コちゃんは、『東天紅トイイマス、毛沢東ヲタタエルウタマス』という。『東天紅』は中華料理店の名前じゃなかったんである。」

ネコちゃんは、路という、北京の某大学院で日本語を学んでいる女子学生。本書の帯には「まったくためにならないアジア紀行エッセー第3弾」とあって、前一書に続いて読んでしまった。肩の凝らない、善意あふれる、自己主張のはっきりした個性的な面々が登場するエッセー。しかし、「東天紅」は「東方紅」だろうね。小生の学生時代には、「東一方紅」、太く陽し昇……という歌がよく聞かれたものだった。ネコちゃんが、このように教えたのなら、日本ばかりでなく中国の若い世代にとっても文革は遠い歴史になったのだろうか。

※ 蛇足。本誌創刊号に、ダイエー栄町店近くにあるアイン薬局のことを書いた。先日、前を通ったら別の店名に変わっていて、あの文字も無くなっていた。まさか言葉の誤用で薬局としての信頼を失ったわけではあるまいが、生きた教材が一つ消えてしまつて残念。また、本誌二号に、「天気のほう」「東北地方のほう」などという人が多くなった、と書いた(九八年一月三一日夕刻のNHKラジオでも、男性アナが、「時刻のほうですけれども」とやっていた)。すると、毎日新聞の「ちよつとひとこと」というコラム(九七・一一・二九、朝刊)に脚本家の内館牧子氏が次のように書いているのが目にと



まった。一部引用してみる。

語尾上げ言葉と同じように、私がカンにさわってならな  
いのが「の方(ほう)」という言葉使用である。……「おビー  
ルの銘柄の方、うかがってね。それと上着の方、お預かり  
して」……「お客さん、お釣りの方、お忘れになってますよ」  
……「コーヒーにミルクの方、いかがなさいますか。こちら、  
お砂糖の方になっておりますが」うるせえッ。見りゃわか  
るよッ。

「方」という言葉は、方角や方向を表す他に、方面や部  
門をも表す。……おそらく、これを拡大して、何にでもくっ  
つけて使っているのだと思うが、「方面」や「部門」とい  
う言葉に置きかえてみると、大半は必要ないとわかる。「上  
着の方面」も「ミルクの部門」もおかしい。……あいまい  
な広がりを示すことによって、オーバーに言えば責任の回  
避をしたいのだ。しかし、たかが上着や砂糖に何の回避が  
いるものか。情けない。

引用が長くなつたが、論旨にはまったくもって同感だ。

※ 蛇足の蛇足。前号の②に札幌大学YK氏「学ぶことの法則」  
に「すべからく」の誤用があることを書いた。その後、高島  
俊男『お言葉ですが……』「それはさておき」の巻(九八・一)  
の「『すべからく』の運命」の項に、

その「すべからく」が近ごろどうもおかしい。……たい  
ていは「すべて」と同義のつもりで用いているようである。  
……しかしながら錚々たる大学教授の先生がたも今や多く  
「すべて」派に左袒しておられるようで、まことに心もとない。

とあるのを知った。ついで鷺田小彌太(実名だ!!)の一文と、  
西尾幹二・藤岡信勝共著『国民の油断』の例を引き、

著名なる両先生が肩を並べてこう爾々と押し出しておいで  
になると、気の弱い小生なんぞは「ああこれで『すべからく』  
の先行きは見えたなあ」とシユンとなってしまうのである。  
と結んでいる。

(一九九八・二・二三)